

講義科目名（コース名）	経済史 専門演習 II（桂 秀行）
名前	桂 秀行（経済学部）

Moodle 導入 2 年目ですが、現在二様の用い方をしています。一つは、大人数授業でパワー・ポイントのスライドやその他の資料を予め配布するため、「リソース」の機能を利用しています。学生は講義に出席するにあたり、予め Moodle の当該コースにアクセスして、必要な資料を用意しなければならないのです。もう一つは 4 年次の演習ですが、就職活動でなかなか学生の出席がままならないという周知の事態に対処するためです。少なくとも春学期中は、毎回の出欠と欠席ならばその理由を報告させ（「課題」の機能）、出席予定のメンバーの人数や組合せに応じて演習の内容を決めたうえで全員に通知する（「フォーラム」の機能）ことにしております。

上記のうち後者、4 年次の演習の方は対象人数が少なく全員が顔見知りなので、比較的うまく機能しているように思います。必ずしも全員が毎回の報告義務を履行してくれるとは限りませんが。

問題なのは、前者の方です。Moodle がその威力を発揮するのは、大人数を相手にする場合でしょうが、同時に大きな難点を持つことにもなります。それは受講する学生諸君**全員**の自覚を前提とする点です。Moodle を利用する利点は、学習意欲のある学生相手の利点に限られるのです。最低

限の参加意欲を欠く学生は切り捨てることとなります。学生に最低限の義務を課しそれを行わない者は参加の権利なしとすることは、市民社会のルールとしてはごく自然のことでしょう。しかし、昨今の学生にそのようなことを要求すれば、切り捨てられる部分かなりの数にのぼることは目に見えています。特に春学期において就職活動に熱中する 4 年次以上の学生は、時折しか授業に顔を出しません。そしてその多くの者がいちいち Moodle に予めアクセスして資料を用意する労をとるはずもありません。講義の最終日に、ある 4 年生が就職活動であまり出席できなかったと言いつつ、コースへのアクセスのためのパスワードを聞きに来たのです。1 年目にも同じことがありました。

おそらく現在、最低限の学習意欲を欠く学生をどう教育するかが FD の重要な課題となっていると言えるでしょう。とするならば、資料配布について Moodle に全面的に依存することには問題があるのではないか、それでも学生全員の自覚を喚起できるような何か有効な方法はないか…、来年度に向けて考えあぐねているところです。